

迷っていた。徘徊の旅に出るか否か。前回の木曾路徘徊から約一年が過ぎて、そろそろ何処かへ行きたい気持ちは湧いてきている一方、書き途中の小説は山積みで未読未見の本やDVDも多かった。一日四十八時間あっても足りないくらいにやる事は沢山あったのだが、最近、それらの創作活動や芸術鑑賞への熱意が少し薄れつつもある。何事につけて費やしているエネルギーに比した成果に乏しく、手詰まりの感があった。一度、考え直す必要があるのかもしれないと思い、その転機とする為にも徘徊の旅に出るべきか、自室に籠もって考えに耽るべきか。前日の飲み会の影響もあって目が覚めるのも遅く、十時過ぎまで布団の中で一人悶えていた自分は、ふと、どちらか迷っているその時間自体が最も無駄だと気付いた。前提論で逡巡しては先に進む筈もない。やおら布団から飛び出した自分はインターネットで宿泊先の検索をすると、即座に今日から二泊分の予約を済ませ、急拵えの徘徊の旅に出る事にした。

今回は完全な一人旅である。しかも、当日の朝に宿泊先の予約だけして行き当たりばったりで動き出す正に徘徊の本領発揮といったところか。本来、宿泊先も現地に着いてから決めねば完璧とは言えないかもしれないが、平日ならばともかく休日には今日の今日で現場で泊まり先を決めるのは結構、不安がある。それだけで

時間を費やしてしまいかねない。帰る先が決まっている徘徊と決まっていない徘徊では自ずと気持ちの余裕が違ってくる。

行き先は伊勢神宮、所謂、お伊勢参りである。前に出雲大社には行っているの、いつか神道の総本山とも言える伊勢神宮にも行ってみたいと思っていたのだ。本当は前から高野山や鞍馬山の方が行きたかったのだが、高野山は世界遺産に登録され、鞍馬山は大河ドラマで登場して、双方とも観光客の急増が予想され、到底行く気にはならなくなっていた。そして、今日は二月十一日、紀元節。お伊勢参りをするには中々に乙な日取りだ。自分は右翼でも国粹主義者でもなければ、神道の信者でもないが、どうせなら意味ありげな組み合わせの方が面白い。

そそくさと旅支度を済ませて家を出ると、自分は東京から新幹線で名古屋まで、そこで乗り換えて近鉄で伊勢市まで向かった。一人旅なので話す相手はいない。一心『ナシヨナリズム』なる題の日本の思想についての本も持ってきてはいたが、読む気はしなかった。改めて言っておくが、自分は右翼でも国粹主義者でもない。そうではないからこそ、そうである人々を理解したいと思っ
てはいるが。今回の徘徊の旅は、観光目的でないのは勿論、徘徊自体が目的という訳でもなかった。格好の良い言い方をすれば思索の手段だ。今朝、行くべきか行かぬべきか迷っていた時、考えた事が一つあった。たとえ休日とは言え、自分の部屋にいれば普段の自分を取り囲む様々な環境から逃れられない。パソコンや

音楽やテレビといった娯楽からも、炊事や洗濯といった家事からも、あらゆる日常から離れたところで、解放された精神と視点で考えてみたい。だから、地元から伊勢市までの約四時間の電車移動の間、殆どを自分は取り留めない思いを巡らせるだけに費やした。生き方に関する小難しい考えから女の子に関する軟弱な想いまで。電車は大井川、天竜川、矢作川を次々と渡り、車窓から様々な企業の工場や看板を眺める。その中には、就職活動の時に説明会で訪れた企業もあった。脳内では、鬼束ちひろの歌声が流れ続けている。ウォークマンなどなくても、自然と音楽は聞こえてくる。だから、ウォークマンを持った事はないし、持ちたいと思っただ事もない。

出発が昼近くだったので、伊勢市に着いた時は夕方の五時になっていた。伊勢神宮の参拝時間は午後五時三十分までなので、もう間に合いそうにない。一応、伊勢市駅前の伊勢神宮外宮（げくう）と月夜見宮に向かってみる。民家の玄関には悉く「笑門」と墨書された板の付いた小さな注連縄があった。お伊勢さまのお膝元特有のものなのか。「笑門」には福来たる。或る友人を見ていて、いつも見習わねばと思いつつ、どうしても真似のできない部分だ。外宮の前に着いた頃には五時三十分間際で、入れてもらえたとしても落ち着いて見ていられない。あっさり紀元節のお伊勢参りを諦めた自分は、一先ず宿に入る事にした。

インターネットの検索で見つけた丸二ホテル伊勢は、伊勢市駅

よりは隣の宮町駅に近い。ガイドブックには載っていない有名でも何でもないホテルだ。インターネットで簡単な地図は見たものの、いまいち場所が分からない。地図を見るとか町の人に訊くとかすればいいのだろうが、そんな状況下でついつい勝手に歩いてしまいたくなるのが徘徊趣味の自分だ。殆ど動だけでホテルを探して回る。今回の目的地と言える場所は伊勢神宮だけで、そこに行けないとなれば、どうせ今日は他にやる事はないのだ。辺りをふらふらして、丸二ホテル伊勢に辿り着いた。見るからに寂れた感じだ。インターネットで見た時に、外観や内装の画像が写真ではなくイラストになっていた時点で不安は感じていたが、案の定である。ロビーに客は一人も見当たらず、内装は殴れば簡単に壊れてしまいそうな安っぽさだ。接客態度も良くないし、部屋に入って窓を開けてみればすぐ目の前に建物があつて景色云々どころではない有様だ。高級な観光ホテルは望まないにしても、ここまでとなると旅情はすっかり阻喪される。今晚はホテル内で食事を済ませて部屋でゆっくりするつもりだったのも、変更した。このホテルに長い時間いても、何も得られるものはなさそうだった。

神宮の参拝時間は過ぎたとは言え、まだ夕方六時である。町に出してみる事にする。中途半端な時間に地元を出発し、車内で食事をするのが嫌いな自分は、今日は昼食抜きだった。空腹なので、早めに夕食にしたい。先程、外宮を目指して歩いていたら時にも分かったが、この町にはあまり目ばしい飲食店がなさそうだった。

ホテルも使えないと言つか使いたくない気分なので、思い切ってガイドブックに載っていたフランス料理店「ボン・ヴィヴァン」へ行ってみる。これまた地図なしで探す。オレンジ色の瓦屋根の洋館だし、店がありそうな地域も限られるので、さして迷わない。それなりの高値を覚悟して席に着いてメニューを見れば、意外に安い値段だ。ガイドブックに書いてあったとは違う。店は間違っていない。暫くして気付いた。この店は三部構成になっていて、ガイドで紹介されていた値段は最深部のダイニングで、自分が座っている場所はその前段階のブラスリーの方なのだ。店に入っ「て、お食事ですか？」と訊かれて案内されただけなのだが、多分、ジーンズに草臥れたブーツを履いた客だったので、店員が思い込みで判断してブラスリーの方に案内したのだろう。失礼な気もしつつ、止むを得ない気もする。以前に塩釜でスカジャンを着てフランス料理店に入った時は、流石の自分も場違いだったかもしれないと少しばかり後悔したものだ。少しだけだが、自分は高級料理を崇拜するブルジョア精神の持ち主でもないので、構わない事にする。とは言え、宿が大いに不満だったので、ここは奮発してコース料理に追加料金を払って三重県産牛肉のフィレステーキを注文する。もしかしたら、プチ・ブルジョア的な嫌らしさくらいはあるかもしれない。まあ、いいじゃないか。誰かに迷惑かけてる訳でもないのだ。出てきた料理は不味くはないが、「当たり前！」と叫びたくなる程の美味さでもない。牛肉は柔らかいばかりで、

味にもコクはあるがキレがない。何やらビールの宣伝みたいな陳腐な表現で恐縮だが、自分はグルメでも何でもないので、気の利いた感想は書けないのだ。一番良かったのは、デザート洋梨のシャーベットだった。店内は壁一面にフランスのポスターが飾られ、フランス語の歌が流れていて雰囲気は良く、別のテーブルでは感じの良い若夫婦が赤ちゃんを連れて来ていて、時折、その子の声が聞こえてくるのが自分としては心地好い。食器に店の名前が書かれていて、食後のコーヒー・カップにもトアルコトラジャのマークが入っていたのが、センスとしては詰めの甘いところで少々残念でもあった。食事を終えて店を出る時、店員が小声で「赤ちゃんの音がしてしまっ、すいませんでした」と謝ってくれた。こんな気遣いの一言がもらえるのは、悪い気はしない。

特にやる事もなく夜の伊勢市駅周辺を彷徨う。休日の夜七時過ぎなのに、まるで人が歩いていない寂れ具合だ。ハンバーガー屋や牛丼屋といったありきたりのファーストフード店さえなく、数少ないファミリーレストランに客が集中している。都会と共通しているのは、コンビニエンス・ストアと消費者金融くらいだ。悪い言い方をすれば、この町は伊勢神宮があるというだけなのだろう。地元の人々の生活を思う。地方の若者が東京に憧れる理由が分からないでもない。

ろくに開いている店もなく、かと言ってホテルにも戻りたくない自分は、猿田彦神社に向かう事にした。新幹線の車内でガイド

ブックを観た時、猿田彦神社は参拝時間に制限がなかったのを覚えていたからだ。かくして無謀にも日の沈んだ夜に、地図も持たずの徒手空拳で駅から二キロ〜三キロはある猿田彦神社を目指して歩き始める。店がない上に街灯も少ないので暗い。駅から二キロ以上ある場所へ歩いて行く観光客はいないので、標識は全くなく、自分が本当に正しい道を歩いているのかも分からない。あまりの暗さで階段が良く見えない歩道橋を渡って、境内から怪しげな光を放つ伊勢念法寺を横に歩き、中山寺の鬱蒼とした竹藪が見えてきた所で歩を止めた。地図上の距離から割り出した当初の計算よりも時間がかかり過ぎていて気がしたのである。見知らぬ土地だし、上り坂でもあるので、誤差の範囲内ではあるが、旅の初日の晩に妙な事になってもつまらない。時間をかけて辿り着いたとしても帰る事も考えねばならないのだ。タクシーなど捕まえる事は期待できない町である。収穫なく戻る漁師の様な気分ではあったが、思い直してホテルへ帰る事にした。

伊勢市駅の近くまで戻ってきた時、視界の左に結構な緑が茂っているのが見えた。中へ入る道が開いていて、「豊玉稻荷」と書かれている。どうやら、ここは参拝時間の制限がないらしい。暗さが気になったが、何の収穫もなく帰るのも悔しかった自分は思い切って中に入った。街灯がない道どころではない暗さだ。目が慣れるまで暫く右も左も良く分からない。幾つか道が分かれていて、一つには鳥居らしきものが見える。この先に社があるのだろうか、

塗り込めた様に真っ暗だ。迷信深い性格ではないし、先に何があ
る訳でもないのは想像がつくが、奥が全く見えない間の入口みた
いな鳥居に入っていくのは生理的に抵抗感を覚えて尻込みする。

他の道を探っていると、何やら結構、大きな池が見えた。魚だか
水鳥だかが跳ねる音がする。鳥の鳴き声も聞こえた。人はいない。

神々しいとも言える不気味さだ。足下に気をつけながら池の周囲
を歩く。ほぼ半周すると、休憩所らしき場所があった。地元の神
社を思い出す。規模は、こちらの方がずっと大きい。自分は池
の畔の椅子に座って、じっと景色を眺める。黒い水面に描かれる
微かな波紋、池の向こうの鬱蒼とした木々、その上に広がる夜の
灰色の雲。遠くから、走り過ぎる車の音が聞こえる。ふと、小便
をしたくなるが我慢した。無神論者の自分だが、この雰囲気です
ち小便をするのは流石に抵抗がある。心なし背中に霊気を感じた
りもしていた。気のせいなのは分かっている。人は環境に興味を
付けたがる生き物なのだ。小難しい事は抜きにして、この無人の
静謐な空間を楽しむ事にする。考えてみれば、最近、こんな場所
で寛いでいない。以前は自宅の近くに公園があったが、今の住ま
いは緑などないに等しい繁華街だ。人は、時に自然に身を浸す事
が必要だ。ここには自分しかいない。僅かに隔てた場所では何台
も車が走っているとしても、視界には何一つ他人の存在を感じさ
せるものはない。ただ、様々な黒で色分けした様な景色が広がっ
ているだけだ。理屈も説教も人情もなく、ただ自分と世界だけ。

一頻り堪能した自分は席を立ち、暫く歩くと一ヶ所だけ煌々と明るい一角があった。公衆便所だ。先程から尿意を催しつつも我慢していた自分は、早速、飛び込む。すっかり解放されて外に出た時だ。突如、背後で大きな音がした。思わず振り返る。何の事はない。便所の水が自動的に流れたただけだ。ホッとした時、視界隅の女子便所の窓に妙に鮮やかな色が目についた。人間の両手だ。窓ガラスに凭れかかる様に。驚いた自分が改めて見ると、清掃用のオレンジ色のゴム手袋が窓の外に干してあるだけだった。無論だの理性だのと強がってみても、所詮は暗い所が怖い凡人の自分を確認し、そろそろホテルへ帰ろうとして公衆便所の横を抜けていくと先に「夜間参拝禁止」の立て札が見えた。横の建物の中には警備員らしき人影。どうやら、ここも伊勢神宮の神域の中らしい。考えてみれば、この界限でこれだけ大きな池を有する神社が他にある筈もない。中心である正宮ではないから問題もないのだから、念の為に見つからないようにこそそ元の道へ戻って帰る事にする。

入った所から再び出て、伊勢神宮外宮の正面を過ぎ、道に置かれた案内板の地図を見た。あの池は神域の中にある勾玉池だった。立ち小便を我慢して良かったと思う。紀元節のお伊勢参りのつもりが、紀元節のお伊勢汚しになるところだった。桑原桑原。

その後、ローソンで夜食用にチョコレートと紅茶、今後の徘徊用に地元の地図を買い、入店時にわざわざ扉を開けてくれたバイ

トの女の子に好感を覚えて名札で「奥山」さんという名前をチェックしたりと相変わらずの女好きを發揮しつつ、ホテルへ戻る。戻ろうとした。ところが、困った。ホテルの場所が分からなくなった。最初に来た時は少し迷いつつも着いたし、他の場所には迷わず行けたのに、帰る時になって何とも情けない展開である。買いたてはややはやの地図を道端で広げてみても、場末のホテルの場所を書いてない。記憶を頼りにするしかなさそうだ。少なくとも方角は分かる。特定の地域をローラー作戦でぐるぐるしていれば、そのうち見つかるだろう。そう自分に言い聞かせはするものの、九時前にも関わらず人が歩いていない未知の土地で夜中に道に迷うのは心細い。我ながら馬鹿者だと思いつつ、歩いていると漸く記憶に符合する場所に出た。どうやら、肝心の曲がり角を一本だけ間違えてしまっていたらしい。一安心して場末のへっぽこホテルの部屋に入った。

やる事はない。原稿用紙も本も持ってきたが、創作も読書もする気がしない。そして、何よりこの部屋は様々な思考を巡らせる雰囲気でもなかった。結局、チョコレートを齧りつつ、ダラダラとテレビを観続ける。シュワルツェネッガーのアクション映画の荒唐無稽さに笑い、大塚愛の新曲の歌詞の軽薄さに愚痴を垂れ、大杉漣と野村祐香が、数年ぶりに娘に会おうとする父親と、その娘と勘違いされるデリバリー・ヘルス嬢を演じる中々に笑える深夜ドラマの二人芝居、などなど。

こうして、紀元節に天照の光なき夜の闇を徘徊した一日は終わった。

¥ 伊勢志摩徘徊 第二日

寢覚めが悪い。まともに眠れなかった。シュールな悪夢を見たからだ。覚えてるのは、空襲を受けて打ち捨てられたかの如き都会の一角。今にも崩れそうな或る灰色のビルの一階が全面ガラス張りになっていて、その中で何組もの裸の男女が白いシートに包まれて抱き合っている。道端には全身が泥で汚れた裸の女二人が顔を削ぎ落とされて倒れていた。その失われた顔の上には二人ともフライパンが乗せられている。まるで、デビッド・リンチかデビッド・クローネンバーグの映画を思わせる光景だ。元来、悪夢を見る頻度の高い自分だが、お伊勢様のお膝元で、こんな目覚め方とは気分が悪い。勾玉池で立ち小便をするのも我慢したのに、神も仏もあつたものではなかった。

すぐに活動する気にはならず、テレビを点ける。白血病を乗り越えたアイドルの吉井怜が『ウルトラマン・ネクサス』で怪獣に襲われているのを漠然と眺めたりして、自分の気力のエンジンが暖まるのを待った。暫くして悪夢の残響をやり過ごし、朝食の為にホテルのロビーへ下りる。別の悪夢が現出した。従業員は、自分が先に「おはようございます」と挨拶しても、返事もしなけれ

ば笑顔もない。案内された席で待っていれば、出てきたのは、トースト一枚、超ミニサラダ、牛乳、セルフサービスのコーヒー、それだけだ。自分は特に贅沢な生活をしている人間ではなく、儉約して食事を抜いたり卵かけ御飯で済ませたりする事もある。しかし、曲がりなりにもホテルと称する場所が一泊朝食付き六千円超を取って供する朝食が、一人暮らしの自分が毎朝作っている朝食の半分以下なのは驚きだ。すつかり、この宿が嫌になる。後ろの席では他の宿泊客である女性三人が『シックス・センス』がどこのハリウッド版『呪怨』がどこの、朝からホラー映画の話題で盛り上がっていた。悪夢で目覚め、貧相な朝食にホラー映画話とは、実に爽やかな旅先の朝で結構な事だ。自分は、早々にホテルを出た。

民家の横に繋がれた犬に挨拶したり、一階が『ピリヤード・ヤマナカ』、一階が「山中税理士事務所」と書かれた同じ人が経営していると思われる少し変わった組み合わせのビルに感心したり、町中を軽く徘徊する。妙にスナックが多い。若者が遊べそうな場所が見当たらない。昨夜、徘徊した際も一軒だけ見かけたゲームセンターに客は殆どいなかった。地元の映画館では、『モーターサイクル・ダイアリーズ』や『雨鱒の川』を上映しているらしい。唸らされる渋い選択に、観たい気もしたが、伊勢まで来ておきながら映画館で過ごすのは馬鹿みたいなので思い止まる。

お伊勢参りの手始めに、先ずは別宮の月夜見宮へ。天照大神の

弟神、月読命を祀る神社だ。日本神話では代表格とも言つべき天照大神や須佐之男尊に比して、同じ兄弟でありながら月読命は殆ど登場しない。雲が好きであると同時に月も好きな自分としては、少し気にかかっていた神様だ。行ってみれば、神社もこじんまりしていて小さかった。月読命は控えめな神様だと思つ。四方を木に囲まれ、玉砂利が敷き詰められた上に、装飾や彩色を排した簡素な萱葺き檜造りの神殿だけがある。日本最古の建築様式と言われる唯一神明造だ。左脇の奥には大木が根元で割れた幹の下に石が置かれて祀られている。呆気なくらいに素朴な在り様は押し付けがましい教説もなく、ただ純粹に自然を崇める八百万の神々への信仰を感じさせた。清々しい朝に訪れるには中々に適した場所だ。神域内の木々の間を歩けないかとうろつろしていると、下り坂の道があった。神域を囲む空堀が続いていて落ち葉が積もつて人が入る場所でもないように見えたが、立入禁止とも書いていないので、そのまま進む。空堀の内側は月夜見宮の神域の木々が茂り、外側はぎりぎりまで民家が建つていた。足下には落ち葉や枝だけでなく、ペットボトルや空き缶も散乱している。神々しさを汚す風景だ。気分を害されるばかりなので、引き返した。

次は本命の伊勢神宮である。月夜見宮を出て神路通りを抜け、伊勢神宮外宮北御門から外宮、正式には豊受大神宮へ入る。食事を司る豊受大神を祀っている場所だ。神殿の素朴さは月夜見宮と同じだが、規模が違う。かなり大きな公園と言つていい広さだ。

正宮(しょうぐう)の入口の前には何やら大きな板が立っている。手塚漫画『どろろ』に出てきた「ばんもん」の様だ。神様に邪気が入らないようにする為の障壁なのだろうか。説明は書かれていない。二十年に一度、神殿を新しく作り替える式年遷宮で知られる伊勢神宮は、今は向かつて右側に神殿が建ち、左側は空き地になっている。正宮の神殿は御垣に囲まれていて殆ど見えない。脇から少しだけ覗き見た後、御池の上に架けられた亀石と呼ばれる橋を渡る。天岩戸の扉だと伝わっているらしいが、それほど大きくない。そこからは三つの別宮、土宮、風宮、多賀宮を回る。公園を散歩する気分で歩きつつ、更に勾玉池へ。昨夜、夜の闇の怖さを恐れ、楽しんだ場所だ。池の傍に茜社という神社があり、そこに向かつて無数の赤い鳥居が続いていた。日の光の下では、ここが塗りこめられた闇を感じて尻込みしてしまった場所だとは思えないくらい普通の神社だ。全く不安の欠片も感じない。天照の光の有無が如何に目に見えるものの印象を変える事か。ふと、人生も同じ様な気がした。先が見えないと不安は募るが、見えてしまつと恐れていた自分が馬鹿みたいに思えてくる。一方、見えてしまつたからこそ安心感が面白味を殺いでしまい、脱力感を生む。今朝の勾玉池は、昨日の不気味さなどどこへやら、数人の市民が犬の散歩やジョギングをしている。長閑な光景が微笑ましくもあり、人を寄せ付けなないかの如き昨夜の静謐さが恋しくもあつた。

お伊勢参りの第一段階である外宮参りを終えた自分は、内宮な

いくつ)へと歩き始める。横の道路を大型観光バスが次々と走り抜けていく。今では皆が車で旅行するが、それでは旅情は十分に味わえない。かつて、お伊勢参りは遙か東京からここまで歩いてきて、外宮で参拝を済ませて内宮を参拝しない人も多かったという。流石に東京から伊勢まで歩く余裕はないが、外宮から内宮への距離を実感してみるのも一興だ。三十分ばかり歩いて猿田彦神社へ着いた。猿田彦と聞くと、ついつい手塚漫画『火の鳥』を思い出す。外宮での「ばんもん」にしる、我ながら手塚に毒されている。いつか自分も、他の人にふと連想される作品を書いてみたいものだ。猿田彦神社の脇には、妻である天宇受売命(アメノウズメノミコト)を祀った佐瑠女(サルメ)神社があった。縁結びの御利益があるらしく、それゆえか黒いスーツ姿の女性が一人、熱心に手を合わせている。自分も暢気な立場でもないのだが、頑固な無神論者なので手は合わせない。基本的には神仏に手を合わせない主義なのだ。誰かと一緒の時は付き合おうが、一人でいる時には手は合わせない。それでも、それほど不幸になっていないのだから、その程度なのだ。信仰による寛容さや優しさよりも、信仰による頑迷さや身勝手さを自分は恐れていた。

猿田彦神社を出て内宮へ近づいてくると、車が渋滞している。昨日からずっと観光地とは感じられない程度の人しか見ていなかったのが、ここに来て一変した。連なる車列の横に建つ神宮会館の前には「国民総参宮」と大きく書かれた幟が幾つもはためいて

いる。鳥居の前は駐車場になっていて先程の大型バスが何台も停車し、驚く程に沢山の人がいた。昨夜の伊勢市街とは全く別世界だ。五十鈴川に架かる宇治橋を渡り、参道を進む。山の中、大木が立ち並ぶ空間で玉砂利を踏みしめて歩くのは中々に信仰心を呼び起こしそうな舞台装置だが、周囲の多くの観光客が神様そつちのけで鹿にばかり気を取られていたり、携帯電話で話しまくっていたり、神々しさを味わうのを妨げる不逞の輩ばかりだ。日本神話における最上級の神にして天皇の祖とされる天照大神を祭る正宮の前にも、まるで道端の物売りに群がるみたいに観光客が集まっている。自分もその一人だが、目の前の中年女性みたいに正宮を覗き見ながら、「ええ、これだけええ」などと失礼極まる言葉を発したりはしない。自分は無神論者だが、神域に来れば一定の礼儀は守るべきだと思っている。神や仏は見世物ではない。「最近の日本人は……」などと内心嘆いてみても、多分、お伊勢参りが流行った江戸時代も庶民がどれほどの信仰心を持っていたかは少々疑わしい。少なくともメッカやエルサレムを巡礼する人々と同じではなかっただろう。人生における楽しみの一環としてのお伊勢参りだった気がする。結局、観光と大差ないのかもしれない。

正宮の隣に位置する平成二十五年に次の遷宮が行われる先である古殿地を横に抜け、裏参道を通って荒祭宮へ。ここは人が少ない。月夜見宮と同じく規模が小さいからだろう。だが、ここにも古殿地があった。伊勢神宮の神殿は全てが遷宮を行うのだろうか。

戻りがけ、観光客は或る小屋の前に集まっていた。「晴勇（ハレイサム）号」と名付けられた芦毛の神馬だ。動物は好きだが、神馬でありながら見世物になっている様は哀れで、自分はすぐにその場を離れた。

友人の為に安産の御守りを買ひ、写真展が行われていた建物で一休みする。写真展は式年遷宮の特集をしたものだ。次の遷宮は約十年後にも拘らず既に準備は始まっているらしい。昔は国費で行われていたが、今は「浄財」でやらざるを得ない旨、どこなし恨みがましく説明が書かれている。政教分離原則からして当然とも思えるのに、どうしても、ここに来てからは右翼臭がしてならないのは、かつての国家神道の総本山ゆえに仕方ないのか。アニミズムとしての神道には好感を抱いているが、いざ、国家とか英霊とかが絡んでくるといかがわしくて好きになれない。独特の右翼臭を払拭しなければ、これからの神道は存続が難しい気もする。一方、北朝鮮や中国との問題もあつて、ネオコンならぬネオ右翼が出現してきて妙な憲法改正まで議論し始めている現状を見ると、右翼として生き残る選択もあり得るのかもしれないが。

宇治橋を渡つてすぐ右にある「おほらい町」と名付けられた門前町で昼食にする。とにかく人の多さにうんざりして一休みしたかったので、手近な所にあつた「えびや大食堂」に入り、伊勢うどんを食べた。これが結構、美味い。伊勢神宮の神明造の簡素さに似た感じで、濃い醤油味のつゆと少量の葱がさっぱりしている。

満足して気が大きくなつた自分は、三宅酒店で御神酒として伊勢神宮に納めている日本酒「白鷹（はくたか）」を戴く。御神酒らしく、癖のない味である。昏間から酒とは、いい身分である。近日中に友人宅に集まつて牡蠣鍋パーティーを行う予定があつたので、土産として一本購入した。

そろそろ移動しようかと歩いていた時だ。聞き逃せない音が聞こえてきた。和太鼓の勇壮な音である。ガイドブックに「おほらい町」の中程にある「おかげ横丁」で和太鼓の演奏が行われると書かれていたのを思い出した。偶然にも演奏の時間に合つたらしい。これ幸いと「おかげ横丁」に足を踏み入れた。入つてすぐの所にある太鼓櫓で、「おかげ横丁」専属の神恩太鼓というグループが演奏をしていた。「神路（かみじ）」という曲だ。太鼓のリズムに笛のメロディーが重なつて、実にかつこい。終盤、小さなシンバルの様なチャップも加わつて大いに盛り上がる。十分弱の一曲だけで演奏は終わった。柱に貼られた案内を見れば、「おみやげや」という店でCDも売つているとか。こんな地域限定CDは、ここで買わねば手に入りそうにない。すぐさまCDを購入した。

腹枵えを濟ませ、友人と自分用のお土産も買つて満足し、伊勢市街へ戻る事にする。他の観光客は皆が車で移動していくが、自分だけは来た道を同じく歩いて帰る。帰り道も車は渋滞だ。横を自分は、すいすい歩いて行く。足下を見れば、まだ寒いのには蒲公英が一輪咲いていた。思わず足を止めて眺めていると、意外にも

周りに幾つか咲いていた。もう春も近い。こんな事は車で走り過ぎてしまつては気付けない事だ。途中、不動産屋の看板に三DK、六万八千円と書かれた値段の安さに驚いたり、郵便局のATMを利用してしようとして土曜は十二時三十分までしか使えないと知つて更に驚いたりする。伊勢市駅前まで戻つてきてから、三交百貨店と書かれたビルに行つてみるが不況のせいか既に閉店しているらしく、結局、野島書店に入る。定番となりつつある旅先での本屋見物だ。品揃えは少なく物珍しい本もなく、東京観光の雑誌を立ち読みする。伊勢市まで来て何をしているのやら。

まだ時間があるので、二見浦へ行く事にした。JR参宮線の二見浦駅で下り、暫く歩く。ひな祭りのイベントが行われているらしく、通りのどの店にも雛人形が飾られていた。この名所である夫婦岩は予想していたよりも小さい。観光客がうじゃうじゃいて風光明媚も何もあつたものではなかつた。挙句、カップルに声をかけられて、写真を撮つてあげる羽目に陥る。別に迷惑ではないが、嬉しくもない。これでは風情が感じられないと思つた時、来る途中、夫婦岩と反対方向の矢印で海水浴場と書かれていたのを思い出し、そこへ行く事にする。海水浴をしに行くのではない。自分はカナヅチだし、第一、今は冬で季節外れだ。そして、季節外れだからこそ、人がいない筈だつた。目論見は当たつた。

冬の二見浦海水浴場に人は殆どおらず、視界左の方で砂浜サッカーに興じる地元の少年達がいるくらいだ。それも座る場所を変

えれば声だけで姿は見えない。冷たい冬の海風に吹かれ、少年の声と波音を聞きながら、昨日の夜食の食べ残しのチョコレートを齧る。薄暗い曇天と凍える様に波打つ海の間、水平線に浮かぶ何艘かの船。視界の右端には小さく夫婦岩が見えた。目の前の砂浜で、一羽の鳥が何か啄ばんでいる。裸で寒くないのだろうか。つまらない事を考える自分を気にする様子もなく、鳥は飛び去つたと思えば戻つてきて、戻つてきたと思つたら飛び去つて、そんな事を繰り返している。約三十分間、二見浦を眺めてぼんやり過ごした後、駅へと戻つた。

電車の本数は少ない。ここでまた約三十分間、駅のホームで名前も分からない鳥を眺めたりしながら過ごす。時間の無駄とも思えるが、普段、追い込まれたり追い込んだりの騒々しく気の休まらない日々を送っていると、のんびり一息つける時間は贅沢で貴重なものだ。やつてきた二両編成のワンマン電車では、首都圏と同様に携帯電話のマナーについてのアナウンスが流れているが、不審物についてのアナウンスはなかつた。ここでテロを起こす人間などいる筈もない。殆どの乗客は鵜方駅で下りていった。今夜の宿、志摩観光ホテルは終点の賢島駅近くだ。駅から歩ける距離なのは分かつていたが、昨夜も含めて伊勢神宮への道を一往復強歩していたので足が少し痛く、軟弱にも送迎バスへ乗り込んだ。ところが、バスは走り出した途端、瞬く間にホテルに着いてしまつ。発車するまでの待ち時間に歩けばバスより早く着いてしまつ

ただらう。ついつい弱気を出した自分が嫌になった。

志摩観光ホテルは丸二ホテル伊勢とは違って接客態度も良く、荷物を持って部屋へ案内までしてくれる。和室の部屋は結構広く、風呂と便所も別で、便器はウォッシュレットだ。卓上にお茶とお菓子も置かれている。窓のカーテンを開ければ、英虞湾の海が見えた。観光ホテルとしては普通なのだろうが、昨日が昨日だったので、やけに嬉しい。

夕食はホテル内の和食店「浜木綿」で会席料理を注文し、更に地酒の「義左衛門」を加える。伊勢志摩だけあって、伊勢海老の刺身、伊勢海老を練りこんだ卵焼き、鮑の唐揚げ、雲丹の塩辛、伊勢海老の吉野煮など、海の幸が一杯だ。終いには赤出しの蓋を開ければ、そこにまで伊勢海老だ。ただ、伊勢海老は見かけは豪華だが、食感はともかく味にはあまり特徴がない。それよりもデザートの方が美味かった。カクテルグラスの中に下から順に水羊羹、薄い餅、苺ゼリーを三段重ねにした変わり種だ。

すっかり満腹ほろ酔いの自分は部屋で熱い風呂に入って足の疲れを癒すと、三浦友和と内山理名が主演の裁判員制度のドラマを、寛いだ気分で観たのだった。

こうして、お伊勢参りと伊勢海老尽くしの一日は終わった。

¥ 伊勢志摩徘徊 第三日

キング・クリムゾンの『二十一世紀の精神異常者』が流れて目を覚ます。昨日に続けて悪夢を見た訳ではない。携帯電話の目覚まし機能に、この名曲を入れていたからだ。

時間は六時半。旅先で何もこんな早く起きる必要もないところだが、それなりの理由があった。日の出を見る為である。以前から再び徘徊の旅に出る時は、広い視界で日の出と日の入りを鑑賞したいと思っていたのだ。当初は、鳥羽湾の伊射波（いさわ）神社で日の出を、英虞湾のともやま公園で日の入りを、と考えたのだが、いずれも交通の便が悪く車でないと行けそうにないので徒歩徘徊主義の自分は諦めたのである。ところが、昨晚、志摩観光ホテルの自分の部屋に案内された時、窓からの景色の良さに手持ちの方位磁石で調べたところ、絶好の東向きだった。ここならば、部屋にいながら、日の出を楽しめる。残念ながら水平線ではないが、広い視界だけでも久しぶりだ。今は遠景の見えない家に住んでいる為、それに飢えているのかもしれない。

東の空を見ながら待っていると、六時四十五分頃、一点が眩しく金色に光り輝き、太陽の天辺が出てきた。思わず、「来た、来た」と一人で呟く。適度に雲もあり、太陽の上を横切って中々の陰影を作っている。考えてみれば毎日起こる周期的な天体現象に過ぎないものを、さも意味ありげに人はありがたがっているのだから面白い。日輪の中を一羽の鳥が横切っていく。日が昇るほど、光は強い金色から弱い黄色になっていった。

日の出を拝み終われば、ホテル内で昨日の朝とは段違いの朝食だ。グレープフルーツジュース、ヨーグルト、サラダ、スクランブルエッグ、茹でた野菜、ハム、ベーコン、ソーセージ、トースト、レーズンパン、紅茶。食後、ホテル屋上の展望台へ上がる。冬の朝は寒いが、四方に志摩の景色を望む。

その後、部屋で窓際に座って寛ぎ、この二泊三日で気持ち少し楽になった自分は、ゆっくりと思案に耽る。これまでの生活を振り返り、自分に課す見直し事項をメモ帳一ページに書き留めて、ホテルを出た。

まだ帰るには時間の余裕があるので、賢島駅周辺を徘徊する。リアス式海岸の港には、「レイナ・ペルラ」と名付けられたピンク色の装飾満載の船が停泊している。遊覧船なのだろうが、一向に乗る気がしないセンスの悪さだ。英虞湾よりもデイズニールランドの方が似合いそうである。湾岸の土地には二百坪前後の自称高級別荘住宅地が五軒分ほど販売されていた。幾らするのか分からないが、ここに別荘を建てる気には自分ならなない。

軽く徘徊してから電車に乗り、鵜方駅で降りる。観光地でも何でもない。何か当てがある訳でもない。ただ単に昨日の電車で地元乗客が殆どここで降りたから興味があったのだ。駅から少しだけ歩いた限りでは、ファミリーレストランやコンビニエンス・ストアは数軒あるが、やはりファーストフード店はなかった。ジャンクフード好きではないが、ここまでも長時間にわたってマック

その他が目に入らない生活は新鮮だ。妙に感心する。視界の向こうに「M.JON」と書かれた茶色の看板を見て興奮した。一瞬、ニューヨークンズミュージックの巨人である「R.CON」と読み間違えたからだ。名前も違つ、ただのホームセンターらしかった。長居する気にもならず約三十分で駅へ戻り、そろそろ家へ帰る事にする。

電車が扉を閉めて出発しようとした時、ホームに女の子が駆け込んで来た。既に扉は閉まっていたのに、彼女の到着を待つて扉は再び開いた。首都圏の過密ダイヤで走っている電車ではあり得ないのんびりした展開だ。安易に田舎に住みたいと言つ気はないが、この三日間、特別な事もしていないのに、何か少し気分が楽になった気がするのも確かである。その理由は、この地域の持つ余裕だと思つ。ゆっくりした時間、隙間だらけの町、寂しいくらい人は少なく、だからこそ、軋轢が生じる余地さえない。誰からもストレスを与えられる事なく、誰にもストレスを与える事なく、鳥や海を眺めて過ごす。活力を失った地域だと考えれば単純に肯定はできないかもしれない。それでも、人は求めれば求めるほどに、それ自体が圧力になつて肩や背中を押し掛かる。自分は神明造の伊勢神宮や月夜見宮の様に、簡素に「吾れ唯、足を知らる」、そんな人間でありたいと改めて思った。所詮、何もかもは手に入らないのだ。

優先順位の低いものは捨てて、心の余裕を取り戻そう。そんな

事をこのお伊勢参りで教わった自分は、名古屋駅で新幹線に乗り換える前に十分間で立ち食いきしめんをかきこんで、我等が忙しき街へと帰ったのである。簡素なる境地に辿り着くには、もう少しかかりそうだ。

こうして、鳥や海ばかり眺めた紀元節遅れのお伊勢参り、伊勢志摩徘徊は終わった。